国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 Perspectives on Semantic Roles. Edited by Silvia Luraghi and Heiko Narrog. 2014. vi, 336 pp. John Benjamins.

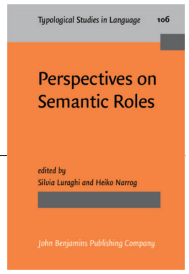
メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2015-10-30
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: ナロック, ハイコ
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000783

国語研プロジェクトレビュー
NINJAL Project Review　　Vol.5 No.3 pp.139-140（February 2015）

〈著書紹介〉

Perspectives on Semantic Roles

Edited by Silvia Luraghi and Heiko Narrog
2014. vi, 336 pp. John Benjamins.



ハイコ・ナロック

1. 本書の目的

特に類型論的観点からの研究に重点をおいて，意味役割（semantic roles）研究の最新の動向を紹介し，今後の研究の進展に役立たせる。

2. 出版経緯

本書は，第一編集者であるシルビア・ルラーギが企画して 2010 年 5 月にイタリア・パヴィアで行われた「意味役割」についてのワークショップでの発表を基にして，参加者以外にも関連テーマで研究を行っていることで知られている者に原稿を依頼し，4 年間の編集過程を経て出版に至ったものである。

3. 構成

本書は 9 章からなり，三つの索引（人名，言語名，事項）がついている。本書は英文のため，インターネットなどで提供されている本書についての情報も全て英語になっているが，本欄では読者の便宜を図って完全に和訳して紹介する。元の英文に関しては出版社の HP（https://benjamins.com/#catalog/books/tsl.106/toc）等を参照されたい。9 章は以下の通りである。

第 1 章　意味役割への視点（イントロダクション）　S. ルラーギ，H. ナロック
第 2 章　意味役割を帰納的に確立する　M. シサウ
第 3 章　格の意味機能の文法化―格標示の拡張と再分析と文法化の普遍性　H. ナロック
第 4 章　通時的な意味図を組み立てる―メタファーの役割　S. ルラーギ
第 5 章　方向格の典型性と非典型性―フィンランド語の向格と入格について　S. キティレ
第 6 章　初期ベーダ・サンスクリット語における経験者格の形態・統語論　E. ダール
第 7 章　発話受信者～受益者メタファーへの疑義―東コーカサス諸語からの論点　M. ダニエル
第 8 章　意味役割と語構成―古代ギリシャ語における道具格と場所格について　E. R. ルハン，C. R. アバド
第 9 章　意味役割から評価的表現へ―独伊仏語における与格所有者構文の比較　D. ニクロー

4. 内容

「意味役割」は，1960 年代後半から J. グルーバーと Ch. フィルモアが提案した概念で，通言語的に共通した動詞における出来事への参与者の役割のことをいう。今の言語学では,「動作主」あるいは「被動者」,「道具」などといった意味役割が当たり前のように使われているものの，通言語的に有効な意味役割の数と種類や，記述におけるレベルの位置づけは未だに定かとはいえない。関連して，意味役割の認定方法や，格や項構造，文法関係との相関関係にも未解決な点が多くある。また，近年の研究では，言語記述の進展に伴う言語類型論的研究の隆盛や，文法化概念の流行に伴い，意味役割の通言語的記述や，意味役割と格標示の歴史的変化という通時的観点への関心も高まっているといえる。

本書では類型論的な立場から意味役割に関する提言を募った。編集過程を経て採用され掲載された論文は，意味役割の認定に関する論考が 3 点（シサウ，ダール，ダニエル），類型論的観点から通時的変化に関する論考も 3 点（ナロック，ルラーギ，ニクロー），そして意味役割の「典型性」について 1 点（キティレ），文法における意味役割と語構成における意味役割の類似性についても 1 点（ルハン，アバド）である。意味役割の認定に関しては，シサウは，多数の言語の対訳資料における格表示を量的に分析して，意味役割をボトムアップ的に構築しようとする。ダールは論争が絶えない「受益者」という従来からの意味役割の存在に疑問を投げかけ，ダニエルは逆に「発話の受信者」という新しい意味役割を確立しようとする（東コーカサス諸語ではそれが形態的に区別されているようである）。通時的・類型論的なものでは，ルラーギとナロックは意味役割の通言語的意味図を構築しようとし，それに通時的な次元を付与しようとし, 意味変化におけるメタファーの働きについて論じている。この 2 点はシサウの論文と共に，本論文集の中でスコープの最も広いものとなっている。ニクローは三つの現代印欧語における（しかし，英語にはない），与格の感情・評価的意味機能への拡張を構文論的に記述している。ルハンとアバドは文法における意味役割と語構成（名詞の派生など）における意味役割の共通点について興味深い指摘をしている。そして, キティレは典型的な方向と非典型的な方向という意味的素性の形態・統語論への影響について論じている。日本語では，場所，物ではなく，人間が方向・目的となっている場合,「～のところ」などを付け加えるが，フィンランド語にも類似した現象があるようである。

本書が，意味役割に関心のある研究者にとって十分に読み応えのある，期待に応えられるものとなっていることを願っている。

ハイコ・ナロック（Heiko NARROG）

東北大学国際文化研究科准教授。哲学博士（独ボーフム），博士（学術）（東京大学）。北海道大学助教授を経て，2004 年 4 月より現職。国立国語研究所言語対照研究系客員准教授（2011 年 10 月～ 2015 年 3 月）。

主な著書・論文：*Modality, subjectivity and semantic change*（Oxford University Press，2012），*Oxford handbook of grammaticalization*（編著，Oxford University Press，2011），*Oxford handbook of linguistic analysis*（編著，Oxford University Press，2010），*Modality in Japanese*（Benjamins, 2005），*Japanische Verbflexive und flektierbare Suffixe*（Harrassowitz, 1999）.